

法政大学 同窓会会報

社会学部同窓会

第22号

発行 法政大学
社会学部同窓会事務局
(月・水)
住所 〒194-0298
東京都町田市相原町4342
☎・FAX 042-783-2421



授業風景(3年生)

昨年10月19日号の『週刊東洋経済』「本場に強い大学」特集によると、法政大学は、全国一〇〇大学の一入試志願者数・入試難易度の10年推移(一九九二年〜二〇〇二年)では第9位、主要五〇大学の有力企業二六〇社への就職者数の5年推移(一九九八年〜二〇〇二年)では私大で第10位、二〇〇一年度決算に見る有力私大五校の財務状況(経常収支、売上高経常収支率、教育研究充実度、寄付金豊富度、運用可能資産、授業エクセレンス)プログラムへの採択、教育条件の組み合わせで見た「実力度」ではベスト30大学に入ると、法政大学は健闘している。

「21世紀COEプログラム」(旧称トップ30大学構想)というのは、文部科学省が世界最高水準の大学育成および国際拠点形成をめざして、平成14年度事業として競争的資金を重点配分するもので、全国の国公私立一六三大学から四六四件の申請があり、その中から五〇大学・二三件が採択された。法政大学も人文科学分野で大学院日本史専攻(拠点リーダー、中野榮夫文学部教授)を中心としたプログラム「日本発信の国際日本学の構築」が採択され、日本文化研究・国際日本学の国際拠点をめざすことになった。いわば、「世界クラス」の大学づくりの仲間入りできたとも言えるようか。事業推進担当者の中には、田中優子社会学部教授も挙げられている。

最近刊行された朝日新聞社の「大学ランキング二〇〇三」によると、二〇〇二年度入試の偏差値は殆どの学部で60点以上である。法学部67、文学部64、経済学部63、工学部54、社会学部63、経営学部62、現代福祉学部66、人間環境学部68、国際文化学部64、情報科学部57。地方出身の受験生から「法政大学に合格するのは難しい」という声が聞かれるのも、肯けるところだ。

外から見た法政大学 善戦健闘の評価!

最近、法政大学がとって元気の足るである。少子・高齢化社会を迎えて「定員割れ」の大学が続出し、大手私立大学といえども安閑としてはいられない。まさに「大学冬の時代」といわれるほど、危機感ただよう状況である。他方で、21世紀は「知の時代」といわれ、企業の中だけでは「知」を生み出す力が不足しており、産業の再生および日本経済の再生をにぎる力に大学があるとは十分に期待が高まり、大学改革に注目が集まる。そういう中で、このところいくつかの指標の測定において法政大学の社会的評価が高くなっている。

では、何が、どこが評価されているのか、最近話題になっているテーマを拾ってみる。

今年度の入学志願者数は九万三千人に達し、最高記録を更新した。3月7日号の『週刊朝日』は「法政は日大を抜いて早稲田、立命館に注ぐ3位」と報じた。前年比一万二千人増は全国一の増加である。(詳しくは2面参照)

学校法人初の格付け「AAマイナス」を取得。さらに2月7日付の新聞各紙で「法政大学、学校法人初の格付け取得、格付け評価は東京三菱銀行や日立製作所、フジテレビ、三井物産と同ランクのAAマイナス」と報道された。

格付投資情報センターR&Iの格付けは、全部で21段階に分かれており、

4月22日午後5時から8時すぎまで法政大学多摩キャンパスB棟三〇一教室で公開シンポジウム「イラク戦争を考える」が開催された。主催は、学生サークル「Tana Can Change」と社会・経済同窓会教員有志。二〇〇名近くの学生、教職員が参加し、夜遅くまで熱心に意見交換を行った。

平塚眞樹先生(社会・教育)の司会で、はじめに奈良本英佑(経済・中東現代史)、増田正人(社会・

足度を高めるカリキュラムの経営、教学両面にわたって外部の有識者から評価してもらい、大学の質的向上に生かしていこうというものである。評価委員は、OBの大島雄次安田生命会長や学長経験者、学者の8人で、4月から2年任期。

学外からこのように高い評価が得られたのは、一九九九年からの5学部の新設、既設学部での新学科の設置、大学院の拡充、有能な教員スタッフの確保、学生の満

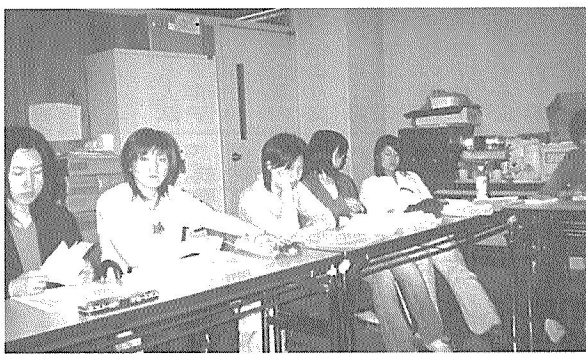
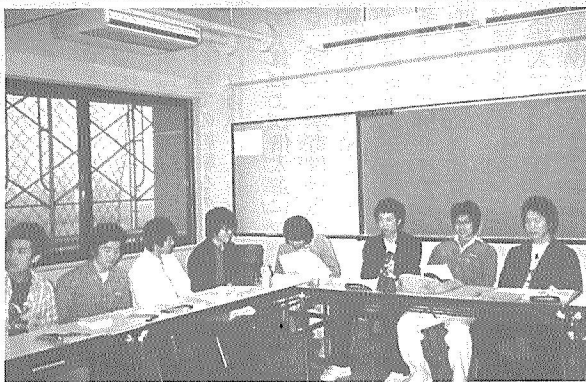
社会的評価が高くなっただけに、他方では、大学の使命とは何か厳しく自問し、内実の充実・発展のために格段の奮闘が求められる。(文責 編集委員会)

多摩キャンパスで 「イラク戦争」公開シンポジウム 学生と教職員が熱心に討議

アメリカ経済論の両先生から、イラク戦争の歴史的・経済的背景、アメリカの東・ベトナム政策の変遷、アメリカの石油政策、ブッシュ政権を支えるネオ・コン(ネオ・コンサーバティブ)、新保守主義の意図、アメリカが開戦に踏み切った理由と戦後の見通しなどについて報告があり、ついで羽場久澄子(社会・国際関係論)、佐々木隆雄(経済・アメリカ経済論)、大崎雄二(社会・中国地域研究)の三先生から、アメリカの単独行動主義にどう対抗するか、イラクの戦後復興のあり方、国際秩序の再構築をどうするか、9・11事件以後の安全保障論の変化とイデオロギー問題、マスコミによる戦争報道、情報操作のあり方などについてそれぞれコメントが行われた。

討論では、学生諸君が積極的に発言し、国際反戦パレードや「ピース・ムーブメント」での体験を語った。

(竹下)



ゼミ風景(1年生)

イラク戦争を考える

盛田勇之進(54年卒)

ありとあらゆる新型の兵器を投入したアメリカのイラク侵略は大方の予想どおり圧倒的な軍事力によって第一段階は終わった。

しかし、世界的規模をもつて展開された反戦運動はその目的を達成できなかったが、将来にむけて大きな希望をもたせてくれた。

この時点でイラク侵略によって提起された問題点を理解しておくことは我々にとつてきわめて大切なことだと考える。

先ず九・一一同時多発テロの衝撃によって急速に変化していったアメリカについてである。

イラク侵略は単に石油を求める軍事行動にとどまることなくアラブ世界に対する絶対的支配を確立しようとするキリスト教的な「新保守主義」であることを忘れてはならないと思う。それは京都議定書や国際刑事裁判所に対する否認に表われているようにアラブに対するだけでなく全世界に対

二〇〇三年度 総会・懇親会のお知らせ

二〇〇三年度社会学部同窓会定期総会を左記の要領で開催いたします。

日時 二〇〇三年七月十二日(土)午後一時〜二時

場所 市ヶ谷キャンパス・55年館教職員食堂

議事 (一)二〇〇二年度事業報告(二)二〇〇二年度決算(三)二〇〇三年度事業計画(四)二〇〇三年度予算

懇親会 午後二時〜四時
懇親会費 五、〇〇〇円。
参加申込みは事務局まで。

講演 「イラク戦争とメディア」
須藤春男
社会学部教授
懇親会費 五、〇〇〇円。

(五)補充役員の選任、
(六)その他